

# 泊瀬と長谷寺再説

— 聖処形成の一考察 —

沼 義 昭

## 1 聖なる泊瀬

さきに、われわれは泊瀬（初瀬・長谷）の地が、女神たる観音にふさわしい地であることを、先学の指摘に従いながら考察した（「日本における観音信仰の構造」、『宗教社会学とその周辺』所収）。その際、『万葉集』や『古事記』の歌謡を挙げて、この地と、そこを流れる泊瀬川とが、神祭りの処であり、恋の場所であり、また葬所でもあったことを明らかにした。不思議と恋の歌がこの地に多いが、それもまた神聖な場所を意識した「誓い」の歌であることをも垣間見た。

ここでは、古代の聖処にどのようにして新来の仏教が入り込んだかという観点から、あらためて泊瀬の地を考察してみたい。それによって、古代的信仰と仏教とが、どのようにして重なり合うものか、ということの一端を知りうればと思う。さきの拙論中すでに述べたことがらと重複する諸点もあるが、仏教寺院の縁起や霊験譚が、いかにわが国の古代信仰を踏んだ部分が多いものであるかを知るために、ここでもう一度くり返してみることにした。また右の

論稿ではふれえなかつた縁起類の神話的背景に務めて注意したつもりである。

さて、泊瀬川は、多くの歌で知られるように神聖な川であった。それは「三諸の神の帯ばせる」(一七七〇番)川であり、東北地方の蝦夷の捕われ人がこの河中で「天皇霊」に服属の誓いをなした川であった。すなわち、『日本書紀』敏達天皇十年閏二月の条によれば、東北地方で叛乱を起した蝦夷の指導者綾糟らは、捕えられて中央政府の所在地までつれてこられたが、彼らは、泊瀬川の中流に下りて、三輪山に向い、水をすすって服属を盟ったという。これを見ると、その三輪山を仰げる泊瀬川のほとりは、この川が谷間を出て西北に方向を変え、もうゆるやかな流れになったあたりと想像される。

またこの話は、「七瀬祓所」の一つである「似久那度の祓所」を想起させる。泊瀬川はまたみそぎの川でもあったようである。

七瀬の祓所とは、天皇が息を吹きかけ体を撫ぜた人形を陰陽師が祓う祭儀の行なわれる、水辺の聖地七カ所であつて、いくつかのセットがあつたが、難波・農太・河俣・大島・佐久那度・谷・辛崎(唐崎)という一組に、佐久那度が入っている。この儀礼は、平安朝のころから毎月行なわれたという。

佐久那度の祓所の地は、瀬田川が琵琶湖から南下して、大きく西に九十度方向を変えるあたりで、信楽川との合流点近くであつた。ここに現在も佐久那度神社があり(鎮座地は移動している)、祓いの神を祀っている。佐久那度は、大祓の祝詞や広瀬の大忌の祭(『日本書紀』天武天皇四年四月の条に「大忌神を広瀬の河曲に祭らしむ」と出ている)の祝詞にそれぞれ、「さくなだりに落ちたぎつ速川の瀬に坐す瀬織津比咩」、「山山の口よりさくなだりに下したまふ水」とある「さくなだり」であつて、清らかな急流の瀬が罪や汚れを洗い流すみそぎの場として好んで選ばれている例は、他にも多い(影山春樹『神体山』)。

泊瀬川も、そういう禊祓の川であったことは、天武帝の女子、大来皇女おほくのひめみこが伊勢神宮の齋宮いづきのみやたるべく、この地に忌み籠った史伝によっても知られる。それに触れる前に、この川がまた神の御生れみあの川であったことを提示しておく。

『長谷寺縁起文』によれば、現長谷寺の境内地は、二つに分けられる。一つは泊瀬寺あるいは本長谷寺で、他の一つは長谷寺あるいは後長谷寺である。いまの観音堂の西側の岡にある部分が泊瀬寺で、川原寺かはらでら（弘福寺ぐふく）の道明が、天武朝に造立したと伝えられるものである。現在、新しい五重塔が立っている地域である。それにたいして、十一面観音を安置する舞台造りの観音堂の区域が長谷寺で、道明の弟子徳道が聖武朝に建立したと伝えられている。

泊瀬という名の起りは、次のような靈験による。もとのこの地は三神里みわのさとといい、泊瀬川は神河かみかはとよばれていたのであるが、川上に瀧蔵権現の坐す社があり、昔その社の脇に天人所造の毘沙門天像が祀られていた。古人はそれを「天靈神」とよんでいた。あるとき、雷がそれを取って天に登ったとき、手に持っていた宝塔を泊瀬川の流れに落とし、それが流れてこの三神の里の神河の里に泊った。武内宿禰たけのうちのせくねが卜筮してめでたいこととし、山中に納めて泊瀬豊山とよぶように改めた。その後三余年を経て天武朝の時代に、さきの道明がそれを石室に移し精舎をここに建てた、というのである（『長谷寺縁起文』群書類従、巻第四百三十七所収）。

この伝説はいろいろなことを考えさせるが、さしあたり一、二のことながらに注意しておこう。

第一に、この説は、川原寺の道明がこの聖地に入った時期について、それが天武朝期であったことを記憶している。のちに触れる、有名な道明の「法華説相図金銅盤」の記憶はかすかになっているのだが、その銘文は、天武帝の死の直前に病氣平癒を祈るため、道明がこの地に入ったことを明記している。

第二に、それは本長谷寺の本尊が、泊瀬川から示現した霊像であると主張している。これとのちにふれる「法華説

相図金銅盤」の存在（『長谷寺靈驗記』下、第一に金銅十体の釈迦像が、天武朝につくられ、その像の下に縁起が書かれており、今に当寺にあると述べている。ただし、永井義憲校註『長谷寺靈驗記』では千体となっている）との関係は明らかではないが、泊瀬川なくしては、この地が語られぬ一つの証拠になる。古称とされる神河といい、それはこの地の聖性を告げているのであって、軽々に見過ごさるべきではない。

第三に、その本尊の縁由が、川上の瀧蔵権現に結びつけられていることは興味深い。瀧蔵権現は水の女神とみなされるべき神であるが、その脇に祀られた昆沙門は、この話の中で雷神ニ天神と融合しており、水の女神一天神（雷神）一御子神の水辺誕生という構造に当てはめうる。いくぶん曖昧ながら、賀茂神社の御生れの伝承（『山城国風土記』逸文参照）に繋ぎえよう。のちに見るようにこの瀧蔵権現は、長谷寺一山に深く関わっている。

同様の伝承が、能の観世流で語られていた。世阿弥の『風姿花伝』第四神儀（しんぎにいはいく）の章に、欽明天皇の代、泊瀬川に洪水があったとき、川上から一つの壺が流れ下って来た、という。三輪神社のほとりで人々が取り上げると、中に玉のようなみどり子がいる。これは天から降って来た人だというので朝廷に申し上げたが、その夜、天皇の夢にそのみどり子が現われ、自分は秦の始皇帝の再誕であると告げた。この不思議によって、その子は宮廷によびあげられる。秦（はたの）河勝（なかつ）がこれである。

河勝こそ申樂（まろがく）の祖である。芸を子孫に伝えてのち、彼は難波の浦からうつぼ舟に乗り、風にまかせて西海に漂い出た。けだし化人は跡を留めぬ習いによる。播磨の国坂越（しゃくし）の浦について大荒大明神（たいくわう）と祀られた（現赤穂市坂越に秦河勝を祀る大避神社がある）。本地は昆沙門天である。

この伝承の後段の分析は、ここにおける主題の範囲を越える（最近の論稿では、服部幸雄「宿神論」雑誌『文学』一九七四年十月号・七五年一月号・二月号が示唆するところ多い）。ただ、難波の海岸（神武や応神が上陸し、八十

島祭が行なわれ、みそぎの地でもあり、東大寺二月堂の本尊が示現している)、うつぼ舟(応神記に原型があり、海の彼方より、しばしば母神と子神がこれにこもって海岸に漂着する)などの道具だてと、河勝の本地が毘沙門だといふことが、あの川上の瀧蔵権現の脇に祀られた毘沙門天を連想させる点とを、あげておくに止めよう。

前段に出る、泊瀬川を流れ下る壺についても、あらためて何もつけ加える必要はないであろう(中が空ろな容器にこもって、小さな幼い神が、川から里に示現する。柳田国男『桃太郎の誕生』を参照)、世阿弥も、父の観阿弥も、とくに長谷寺の霊験を蒙った話が伝わっており、観阿弥の幼名は長谷寺観音の啓示によって観世丸と名づけられたといい、かつ彼の将来について祝福も受けている。その子の世阿弥は、義満によって、父の幼名に因んでつけられたともいうが、世阿弥の従兄が三代目を継いだ音阿弥であることを併せ考えれば、この一家の観世音にたいする信仰がたんに伝説に過ぎぬとは、いい切れないものがある(永井義憲『日本仏教文学研究』および戸井田道三『能—神と乞食の芸術』参照)。もちろん、長谷寺における猿楽の興行という経済的利害関係があったにせよ、である。そして、長谷寺は戦国時代まで興福寺に属し、また大和猿楽四座(観世・宝生・金剛・金春)も興福寺に従属していたので、長谷寺と猿楽との関係は浅からぬものがあった。それにしても、山城盆地の古代豪族である秦氏の有名人を、大和の泊瀬にまで引っぱって来た遠由の一つは、この辺にあるか、と想像したくなる。

この泊瀬川の地に、さきにも触れた大来皇女が、伊勢神宮の齋宮たるべく、忌み籠る。『日本書紀』は、極めて簡単に、同天皇二年、「夏四月の朔己巳に、大来皇女を天照太神宮に遺侍さむとして、泊瀬齋宮に居らしむ。是は先づ身を潔めて、稍に神に近づく所なり」と記している。そして、翌三年十月一日、「大来皇女、泊瀬の齋宮より、伊勢神宮に向でたまふ」という。この簡単な記述の背景には、実に深刻な事件があった。壬申の乱が、それである。

いわゆる大化の改新の事業を推進した天智天皇が、近江の天津の宮で死の床に伏した時、次の後継者をめぐって宮廷は暗く緊張していた。一応天智帝を継いだのは大友皇子おほとものみこであった。天智帝の同母弟である大海皇子おほしあまのみこが、天智帝の皇太子となっていたにもかかわらず、死病の枕頭において皇位を辞退したのである。天智は実子の大友皇子への継承を望んでいた。即日、大海人皇子は出家し、二日後には吉野山へ走る。天智帝在位十年（六七一）、十月のことである。十二月に、天智帝は死んだ。

翌六七二年六月、近江と吉野との間の疑心暗鬼の緊張は爆発した。大海人皇子は、蜂起の意を決して吉野を秘かに脱出した。従う者、僅かに男二十余人、女十余人。兵は東国に求める予定であったが、それは一つの賭であった。古来——まさしく神武以来かかる反逆の成功したためしはない。

その脱出行は惨憺たるものであった。夜を日に継ぐ山路の旅で、一行は疲れ果てる。二十四日に出発し、二十五日伊賀に入って味方がおいおい集まったが、その夜も疲れた皇后（のちの持統帝）をゆっくり休ませることもできない。あまつさえ、雷が鳴って大雨が降ってきた。旧六月、夏とはいえ、一行は衣服もぬれて寒さにふるえた。一軒の家を焼いて暖をとるありさまである。

その夜も明けた二十六日の早朝、朝明郡あさけのこほりの迹太川とほかは（現三重県三重郡の朝明川）のほとりで、一行は遙かに天照太神を拝礼して戦勝を祈願した。おそらく、まんじりともしない夜明けであったろう。

やがて、大海人皇子方が勝利を収めるが、勝敗も定かならぬ、しかも雨の寒さにふるえた危機的条件の下でのこの川辺の神祭りは、強烈な印象を残したいちがいない。大来皇子が泊瀬の地に、伊勢神宮の齋宮たるべく籠ったのは、戦後処理に追われていた翌年の四月のことであった。むしろ、それは、新王朝建設に当ってなすべき最重要事の一つであった、というべきかもしれぬ。

のちのちまでも、その印象は残存した。いや、天武朝の権威増大とともに、それは増幅されていった。持統帝十年（六九六）七月に壬申の乱に大功のあった高市皇子が死んだとき、柿本人麿呂は葬送に当って

去く鳥の 競ふ間に 渡会の 齋宮ゆ 神風に い吹き惑はし 天雲を 日の目も 見せず 常闇に 覆ひ賜ひて  
定めてし 瑞穂の国を……  
〔『万葉集』二一、一九九〕

と歌い、あの乱における伊勢神宮の神助をあらためて想起している。その二十年式年遷宮の制度も、天武朝において定められたと考えられているのである。

天武朝の政治的課題は、天智帝が発起した天皇家の権威の確立を、完成することにあつた。『日本書紀』および『古事記』の編纂の下命もその一つの事業であり、皇祖を祀る伊勢神宮の再確認は、王権の宗教的・精神的支柱を樹立する役割を果たすために不可欠であつた。彼はまた仏教を重視し、舒明帝が着手したままであつた百濟大寺を飛鳥にうつして高市大寺を造り（のちの大官大寺＝大安寺）、薬師寺を創建した。また川原寺・飛鳥寺（元興寺）へも新たな施入を行なっている。

齋宮大来皇女は、天武朝における、このように重要な諸政策の一環を担って、泊瀬に來た。齋宮の地がどこかは確定しえないようである。寺伝では化粧坂の巨石のところをその跡とするし、泊瀬川の上流の小夫をそれとする説もある（保田与重郎『長谷寺』）。

禊祓の聖なる川の上、右の小夫の手前に現在瀧倉というむらと瀧蔵権現社がある。それはむかしから、長谷八郷の総鎮守とされてきたのであるが、長谷寺の地主神でもある。ところが長谷寺は、もう一人の地主神を持っている。すなわち与喜山の神で、前者は本地主、後者と喜天神は今地主とよばれる。この両者の関係について『長谷寺靈驗記』（『続群書類従』所収による）が、興味ある話を伝えている。因みに、この『靈驗記』は、上下二卷、両卷通じて五十

二の靈驗譚をのせている。考証によれば、編纂は鎌倉時代で、承久元年（一二一九）を下らぬ以前に成つたろうという（永井義憲、上掲書）。

ところで、寺院の地主神が、仏教進出以前のその土地の神々であり、寺院建立に当って、当該の土地が神聖な場所であることを証明し、その占有権を譲渡し、かつ仏教の擁護者たることを誓約し、将来を祝福するものであることは、すでに上掲拙論でも見て来た。長谷寺の地主神も、もちろんこの例にもれるものではないが、かなり具体的に、あえていえば劇的に物語られる両地主神の交渉は、神祇にたいして仏教側がとった態度をうかがい知る好例である。それは次のような話の筋になっている（上巻、第十一）。

朱雀院の時代（九三〇—四五）に、神殿の大夫武磨というものがいた。一生不犯、俗体であったが仏神に仕え、験もあらたかであった。天慶九年（九四六）九月十八日の夜、彼が観音堂に籠っていたとき、寅の始めの刻（午前三時）夢に狩衣を着た人物が現われ、名は告げず、「われは大威験の神である。この山に住して観音に値遇したいと思う」というと覺えて、夢さめた。

不思議と思つて日を過して二十日になった。その日の夕方、泊瀬川の下流武磨の家の前に、六十ばかりの老人が狩装束を着て、幻のように石の上に腰かけていた。そのさまは氣高く、凡人とも思えぬ。武磨がよく見ると、十八日の夜に夢に見た神の姿ではないか。

武磨が注意して見ていると、観音堂の方に向つて一町ほど登り、川に下つて水を浴びて路の端の石に腰かけた。みるからにくたびれた様子である。武磨は食事をさし上げようと思ひ、とり返してまた来て見ると、観音堂に真直ぐに登っているところである。彼は道明上人の廟のところまで追いついて、食事を供した。

その後、武磨が注意して見つめていると、彼の人は観音の御堂前で数刻祈念したのち、鎮守の瀧蔵権現社に参つて



念誦している。その夜半に及んで、天から黒雲が降りて来て、彼の人を巻き覆い、また拝殿の中にまで充ち満ちた。武磨がいよいよあやしんで見ていると、黒雲が少し晴れた中から、彼人は束帯装束になり、多くの眷属を連れて現われた。

彼がなお見つめていると、瀧蔵の御殿の扉が自然に開き、中からまた束帯姿の人物があまたの眷属をひきつれて現われた。二人はたがいに礼儀して拝殿に登り、数時間物語りをなされている。それを聞くと、「われは右大臣正二位天満天神菅原某である。罪なくして鎮西の地に遷されたのをうらみ、悪心を発して多くの人を損した。その罪業深くして苦患を受けようとしている。この山に住して大聖観音に直遇し、その苦をまぬがれたいと思う。この山に社を一つ造るほどの地をわれに許してはくれまいか」という。

瀧蔵権現は答えていわれる。「われは昔よりこの山の地主としてこの川上に住している。この山は仏法相應の地で、種々の不思議がある中にも、十一面観音の宝座の石は、衆生の福分の多寡に応じ、あるときは顕われあるときは隠れて来た。いま宿縁によって顕われて大聖観音の宝座となっており、われはもとの住居の山を出て、このようになちまたに交わり、観音の教化を助けているのである。われはもとの山にもどり、ときどきここに出て来て伽藍を守ることにしよう。この山は、すべてあなたに譲ろう。どうか、このちは永くこの山に住して伽藍を守られたい」と。

天神は重ねて尋ねた。「この山のどこに住んだらよからうか」と。瀧蔵権現は、遙かに東の山にある大きな松の木を指さして、「あの地は断惑修善のためよき地である。かしこに住し給え」といわれた。天神は俄かに雷神となつて虚空に鳴り登り、その松の木に至られた。断惑修善のためよき地、というので、与喜大明神と名づけ奉った。

はじめは社殿もなかったものを、天曆二年（九四八）に宝殿を造立し、同年九月二十日氏神と称して祭りを営むようになった。それは、天慶九年に初めて天神が影向されたときのありさまを表わして、儀式となしたものである。す

なわち、まず神輿を、泊瀬川の前、武磨の家の前に出す。今の惣門の前である。次に大路の四辻にて休息する。これは水を浴びて休まれた所で、いまの与喜の橋詰めである。次に道明上人の御廟の前で御供をそなえる。今の二王堂の前である。ここは武磨が食事を供したところである。

もともと、北野明神は十一面の化現である。何の苦患があるか。しかし、この山の靈威無雙のことを顕わさんのために、このような示現があったのであろう。

これが『靈驗記』の語る次第であるが、現に参道の途中に、石をかこんだ玉垣の地があって、与喜天神の御旅所になっている。

『靈驗記』にいう第一の神の「腰掛け石」は、川から示現した神の依った石であらう。「与喜の橋づめ」は、古い禊祓の川瀬であつたらうか。それにしても、この靈驗譚は、神示現の神話が祭儀の実修の範型となるという、一般的な則をよく示している。神話的時代に神々がなした行為を、その後の人間が、年ごとにくり返し、祭儀として実修する。それがわれわれの現在を確実にしてくれるのである。

また、与喜天神が山上の松に影向したということも、神降臨の依り代としての樹木の一例証となる。さらに、柳田国男は『大和志料』五を引いて、与喜山頂に三つの石があつたという。中央のがちょう鵝形の石は天照大神影向の石、左方のくつ杳形の石は天児屋根命、右のたなぞこいし掌石は太玉命ふとたまの座した石であるという（『定本』第十一卷「神樹篇」なお、群書類従「縁起文」には、東の山の腰に川をへだてて、鵝形の石があり、その南に杳形の石があり、前者は天照大神、後者は春日大明神の影向の石であるといっている）。松の木といい磐座の存在といい、与喜山もまた典型的な神体山である。

現在、『延喜式』にもいう大和の「山口の神」の一つ、長谷の山口の神は、現愛宕山たちからをの手力男命の社と決定してい

るようであるが、そうとしても与喜山の古いありようと伝承も捨て難く、まさしく『靈驗記』の語るように、泊瀬の地は、山神と水神が相携えて影向・擁護する山間の聖地である。

このような性質の地はまた、祖霊の鎮まるところでもある。前掲拙論でもふれたように、泊瀬はまた岩屋というものを介して、死霊の集う地でもあった。

事しあらば小泊瀬山の石城にも隠らば共にな思ひわが夫

(十六、三八〇六)

という万葉の歌の「石城」とは、西郷信綱教授によれば、石屋を意味するという(『古代人と夢』)。「高山の磐根し枕きて死なましものを」(二、八六)、「鴨山の磐根し枕ける」(二、二二三)などの表現に見られる、死と結びついた磐根も、死後に行く他界と表象された山の岩窟を意味するという。

確かに、『常陸国風土記』に同類の歌がある。すなわち、新治の郡笠間の村に、草穂山という山があり、昔油置売命という山賊がいた。いま森の中に石屋があり、次のような歌があるという。

こちたけば をばつせやまの いはきにもゐてこもらむ なこひそわぎも

歌の意は、「人の噂がうるさくなったら、小泊瀬山の山中にある石屋に、つれて行って籠ろうと思うよ。そのように恋いこがれなさんな、いとしい人よ」というところであろう。大和と常陸と、所をへだてて出る「をばつせ」は、もうこれが個有名詞でなく、普通名詞として理解されねばならぬことを示す。

現長野市に属する篠ノ井の地に篠山があり、その麓に長谷なる部落がある。この篠山が往時の長谷郷山＝小長谷山で、式内社長谷神社も鎮座している。ここに長谷寺(信濃札所第十八番)があるのも奇しき因縁か。長谷寺が建って長谷の地名ができたのではなく、逆であろう。姥捨の地名も、をばつせの訛ではないかといわれるのも、傾聴すべきであろう。(西沢茂二郎『姥捨山―故実と文学』)。

「はつせいはせ」なる地名は、この三カ所に尽きるわけではないけれども、少なくとも大和と常陸の東西に、岩屋をともなつて出ているこの名は、信濃の場合には有名な姥捨て伝説があつてかすかに呼応し、死のイメージと重なつている。右の恋いの歌においても、その意は、たんについては山中の岩屋に逃げ込もうというのではなく、死者の岩屋にて暮らす、すなわち死んでも二人で添いとげようという決意を強く表わしたものと解すべきであらう。かくして、次の一連の歌の意も知られる。

土形ひぢかたの娘子を泊瀬の山に火葬せし時、柿本朝臣人麿呂の作れる歌

こもりくの泊瀬の山の際まにいさよふ雲は妹にかあらむ (三、四二七)

これは、「溺れて死みまかりし出雲の娘子を吉野に火葬せし時」の歌

山の際まゆ出雲の児らは霧なれや吉野の山の嶺にたな引く (同、四二八)

と対応する。吉野もまた火葬の霊地であつた。

なゆ竹の とをよる皇子みこ さにつらふ わが大王おほきみは こもりくの 泊瀬の山に 神さびに 齋いつぎ坐いますと 玉梓たまづさの

人ぞ言ひつる 妖言およすれか わが聞きつる狂言たはごとか わが聞きつるも…… (三、四二〇)

### 反歌

逆言およすれの狂言たはごととかも高山の巖の上に君が臥こやせる (同、四二二)

こもりくの泊瀬の山に霞立ちたな引く雲は妹にかもあらむ (七、一四〇七)

狂言たはごとか 逆言およすれか こもりくの泊瀬の山に 虚いはりすという (同、一四〇八)

事実、昭和八年には、泊瀬川の奥の笠かさという地に、奈良時代と推定される集団火葬墓地が発見されている。

## 2 長谷寺の創建

さて、このような聖地泊瀬に、長谷寺が建立されることになる。長谷寺が本長谷寺と後長谷寺に分けられることは、さきにもふれたが、前者が川原寺（弘福寺）の住僧道明によって開かれたことも『長谷寺縁起文』によって述べた。同縁起文は、右の話に続いて、「天武天皇が道明に勅して精舎を建てた。彼の金銅仏像の下に天皇御筆の縁起文がある」と記しているが、同縁起文の上では、この「彼金銅仏像」云々の句は、前後にてらして、雷神にとられた毘沙門天の手にあった宝塔ともとれるし、『靈驗記』によれば釈尊像ともとれて、なにもものなかな不明である。

ところが、明治九年（一八七六）本長谷寺の火災の跡から、現在「法芸説相図金銅板」あるいは「千体仏多宝塔金銅板」と名づけられているものが発見されるに及んで、道明の実在およびその入山の背景が、明らかになった。

この銅板は、現に長谷寺の宝物館に陳列されているが、縦・横ともに約一メートル弱、厚さ約三センチ弱で、中央に多宝塔を画き、全体を四段に等分した上三段に多数の諸仏・諸菩薩などを鑄出し、下一段の中央部に銘文を記している。火をかぶったため、この銘文の中四九字がかけてなくなっているが、銘文全体は十二字一行、二七行、三一九字から成っている。文の前段では窳堵婆そとらば建立の功德を讃え、天皇の無窮を祈るためにこれを造る趣旨とそのため霊峰によるべきことを記す。そして、ここ豊山の地に釈迦の真像が降り、宝塔が泉に湧出したと述べ、降婁の年（戊いづのとし）、漆菟上旬（七月上旬）に、道明が八十余人を率いて天武天皇のために、この銅板を造ったという。

この銅板について、縁起文にふれられていることは右に述べたが、『長谷寺靈驗記』上巻第三および下巻第一にも、「金銅の塔」、「金銅十体の釈迦の像」（前記のように永井義憲校註本が「千体」と読んでいることに注意したい）を天武天皇がつくったと記されている。事実は右の銘文の通りであるが、とくに下巻第一は、天武が当山建立の願をおこ

して帝位を得られ、その願果たしのために自筆の銘文を記した十体釈迦像を造っておさめたという。この点は注意を要する。天武朝の戊の年は二回あり、即位二年甲戌（六七四）と朱鳥元年丙戌（六八六）とであるが、現在一般には後者をとる。銘文は、あの壬申の乱の想い出を何も伝えておらず、『靈驗記』も『縁起文』も、現物を見ていないようである。銘文の趣旨からは、やはり後者の年をとるべきであろう。

朱鳥元年の前年、即位十四年の九月、日本書紀は天武の発病を伝え、三日間大官大寺・川原寺・飛鳥寺で読経させている。十一月には招魂みたまふりの儀式を行なったと、とくに記している。その後小康を得たようであるが、朱鳥元年の五月にふたたび発病し、川原寺で薬師経を説かせた。同月大赦、続いて六月には卜占によって葦薙劍の祟りであるというので熱田神宮に人を遣わし、次いでまた飛鳥寺や川原寺で祈願させている。七月には、宮中で悔過、読経、諸国諸神への奉幣、減税、大官大寺での観音造立、そして朱鳥の改元が行なわれた。八月にも宮中での読経、諸神への奉幣による祈願が行なわれているが、九月に入って四日、親王以下諸臣ことごとくに川原寺に集まって病氣平癒の祈願をしている。天武の死んだのは、その九日であった。

諸伝が記すように、道明はこの川原寺の住僧であったし、金銅板の銘文はこのような状況にふさわしい。因みに、大官大寺は、もと百済川のほとりに舒明天皇十一年（六三九）から建てられ始めて百濟大寺くだらおほでら、天武朝の初期に香具山の南に移転して高市大寺たかち、まもなく大官大寺と改称され、また大安寺とも称した。飛鳥寺は崇峻天皇元年（五八八）に蘇我馬子がつくり始めた寺で、止利仏師作のいわゆる丈六の釈迦尊像をいまに残している。わが国における最初の寺であり、元興寺とも法興寺とも称したが、平城京に移って新元興寺となったが、原元興寺も残されて本元興寺とよばれた。川原寺はまた弘福寺くわふくじとも称し、現在発掘調査の結果斉明天皇の宮跡が寺になったものと推定され、天智帝のころの創建ではないかとされている。往昔大安寺・飛鳥寺・川原寺は三大寺とも、薬師寺を加えて四大寺とも称され

ていた。斉明は天武の母に当り、天武は即位の翌月には、この寺で一切経の書写を始めている。

前にもどって、銅板の銘文にいう釈迦の真像の降下と宝塔の湧出は、それをうかがわせる資料に欠けており、たんなる文章上のあやかとも思われるが、なんらかの奇瑞にもとづいているのかもしれない。同銘文が「心泉」より湧出という表現をしている点のみは、『靈驗記』上巻第三に述べられている蓮華谷の靈池との関係について、考えさせられる。その池は観音堂の西南一町ばかりのところと、同書はいう。それは、行基、徳道、泰澄、智証などの名と共に、『法華経』の「陀羅尼品第二十六」にある十羅刹女示現などの靈異譚を伝え、観音への関伽水を扱んだときもあったようだ。まだこの靈池の跡を確かめる機会を得ていないので、推測のみを述べておく。

ところで、道明であるが、彼が弘福寺（川原寺）の住僧であったことは、『扶桑略記』に見え、俗姓は六人部氏という。十一面観音造立の徳道は、道明の弟子で、播磨国揖保（保）郡の人、俗姓は辛矢田部氏。『縁起文』は、名を造米麻呂、のちに子若といい、斉明天皇即位二年（六五六）の生れ、という。さらに『縁起文』は、徳道の出家を天武帝即位四年（六七六）、生年二〇歳のときとし、道明について「私度の沙弥となる」と記している。沙弥とは、まだ具足戒（僧侶たるに十分な戒律）を受けていない前段階の僧を指しているが、私度という所以は、公の受戒を受けず、当時の律令制の下における官僧となっていないことを示す。

この官僧となるためには、時代が下るとかなり軽くなったが、一定の資格審査を受けねばならなかった。その申請に当っては、師僧・俗姓・身体の特徴・修行の年月・研鑽の領域・読誦可能な經典などを列挙した書類を提出し、試験に合格せねばならない。その上で、公認の儀式すなわち受戒となるのだが、そのような資格附与ができた寺は全国で三カ所、すなわち下野の薬師寺（道鏡が流されたところでもある）、奈良の東大寺、筑前の大宰府の観世音寺であった。

このような面倒な資格審査に応じうるには、かなりの財力と人脈とそしてチャンスが必要であったと想像される。従がって、望みをもちながら私度の僧のままに止まらざるをえなかった沙弥も多かったであろうが、同時にまた、はじめからそれをあきらめるか、官僧たるとは別途の方向をめざしたひとびとも少なくなかった。しかもそういう僧たちは、多く山林山岳に籠って、新しい仏教の呪術力を体得し、官寺の中に居住するのではなく、民間に活躍し、当国家に独占されていた仏教と大衆との間を中継ぎして、多数の帰依者を獲得していった。日本最古の仏教説話集である『日本霊異記』の中で報告されているひとびと、例えば役の行者（修験道の開祖といわれる）は、文武帝の時代に葛木山に籠って孔雀王経の呪法を修したことで知られているし、同書下巻第一に記されている、鬮體になつてなお法華経を読んでいた熊野と吉野の無名の禪師なども、そういうひとびとの中の例である。また同書中巻第二十一に出る、東大寺建立以前に同地に住んだ執金剛神の受持者金執優婆塞、さらには彼の行基なども前半生はかかる修行僧であったし、京都清水寺に関わる報恩大師（桓武天皇期の人）も、そういう僧であった。禪師・優婆塞というよび名は、特に彼らのような山岳修行者につけられた尊称であった。

しかし、山林に修行した僧は、右のような私度の沙弥ばかりではなかった。とくに、奈良時代に入ると、道鏡に象徴されるように、官寺あるいはそれに準じる大寺の僧もまた、神山・名山として知られた山に入って修行することが目立つようになる。天平のころには神叡（元興寺）や道璿（大安寺住、唐の人、天平八年（七三六）来日）が、吉野の比蘇寺（現光寺）に籠って虚空蔵菩薩求聞持法を修しているし（『今昔物語集』巻第十一第五参照）、奈良期末から平安期初めに活躍した元興寺の護明は、月の前半は山に、後半は寺にあったといわれる。また前記の『日本霊異記』において読経する鬮體を熊野の山中に発見したのは、興福寺の永興であつて、彼は熊野にあつて海辺の人を教化しつつ、おそらく那智の妙法山中にあつて修行したと伝えられる。この永興と共に宮中の祈禱僧十禪師の一人であつた広



達もまた吉野の金峯山中に修行した（『日本靈異記』中巻第二十六）。

右の諸例の中、虚空蔵菩薩求聞持法は、記憶力や呪験力増進の秘法とされ、道鏡もまたこれを修し、弘法大師空海もこの法を修行したと『三教指帰』<sup>さんこうしき</sup>の中で自ら語っており、室戸岬の最御崎寺<sup>ほつみさきでら</sup>や石槌山横峰寺<sup>いしづちさんよこみねでら</sup>、徳島県阿南市の太龍寺のある大瀧カ岳、弥谷寺<sup>いやだにでら</sup>（香川県）などが各々その伝説を伝えている。なお敵島の弥山<sup>みせん</sup>なども虚空蔵堂をもち、空海修行の伝説と不滅の燈火を伝え、日蓮の伝記中にも、清澄山上のこの菩薩に「日本第一の智者たらしめたまへ」と願を立て、満願の日に咯血したという伝説を残している。

求聞持法などはこのような特殊な目的を志向するものであるが、一般には、広くは国家安泰、個人的には病氣平癒を実現しうる呪術力を体得するために、山林に入ったのであった。奈良朝期には、中央の僧侶のみでなく越の国の泰澄、下野の国の勝道などが積極的に各地の神山（前者は白山、後者は日光山）を拓いてゆくのであるが、官僧道明が、弟子の徳道のような沙弥、官僧予備軍を他数率いて、天武朝のころ聖山に祈禱のために入っている事実は、天武自身が壬申の乱に先立って、天智の命が旦夕に迫ったとき、吉野山中に出家隠棲した事件とあわせて、注目すべきことである。吉野もまた、右に見た万葉の歌から知られるように葬送の地であり、水分社<sup>みくまり</sup>や丹生津姫神社の存在からうかがえるように、水と山の聖地であったのであるから。この地の現光寺（比蘇寺）および義淵開基の龍門寺にまつわる伝説については、『今昔』巻第十一第二十三、第二十四に出ている。後者によれば、久米の仙人もこの龍門寺にいたことになっており、彼が空から落ちる原因となった女の白いはぎは、吉野川ほとりで見したのであった。

かくして、仏教公伝（五三八年、五五二年の両説がある）より百年を経て（壬申の乱は六七二年）、すでに仏教が古い聖地に入っている事実を知りうるのであるが、十一面観音の造像は、どのようにして行なわれたのであろうか。

まずその像の本体となった、いわゆる御衣木<sup>みそぎ</sup>は、皇円（一一六九年歿）作の『扶桑略記』第六所引の縁起文によれ

ば、近江国高島郡三尾前山より流出した「霹靂の木」であるという。その木のゆくところ、どこでも火災や病気を引き起こすので、めぐりめぐって、大和国葛木郡（磯城郡が正しい）神河浦にいたった。沙門道明と沙弥徳道が、この木によって仏像を造ろうと念願したが力なく、もっぱら礼拝に勤めていたところ、藤原房前ふじはらのむねさきの口ききによって公費を得られるようになり、高さ二丈六尺の観音像を造りえた。仏師は稽主勲と稽文会である。観音像安置の座は、雷公が降臨し、方八尺の磐石を破り作った、という。『扶桑略記』に引用されたこの「縁起文」が、しばしばこれまでもふれた菅原道真執筆で寛平八年（宇多帝期、八九六）に成ったという『長谷寺縁起文』を指すかどうかは、その成立年代の真偽の考証にかかってこよう。少なくとも同文中に、徳道が観音像実現を霊木に祈ったことばとして、「聖朝安穩、藤氏繁昌」という語句のあることなどが気にかかる。同文成立の年から五年にして、醍醐帝の延喜元年（九〇一年）に、道真は、藤原時平らの策謀によって大宰府に左遷されるのである。『長谷寺縁起文』全体には、少なくとも、かなり後代の補筆があると思われる。藤原房前に出会うまえに、このように藤氏繁昌を祈ったというのもわざとらしい。北野天神信仰を引き込んで、古い泊瀬の天神信仰と結びつけようとした作意がうかがわれる。

北野天神すなわち菅原道真の御霊の本地は観音であるという信仰はかなり古く、天慶五年（九四二）、道真の託宣を受けたという多治比奇子たぢひあきこは、天暦元年（九四七）、祠を右近馬場に移してから観音堂を建て、法華経を書写したという。慈円（一一五五—一二二五）は『愚管抄』で、北野天神を「観音の化現」（卷三）と積極的に打ち出している。比叡山と北野天神との密接な関係がうかがわれもするが、道真自身が若い時、観音信仰を持っていた事実とあわせてこの場合信仰はかなり根深かったようである。

ともあれ、この木（『長谷寺縁起文』では楠木であるとしている）が霊本である所以が理解されればよいのであるから、比較的簡明な『扶桑略記』の文に従って、この木の因縁を記しておこう。

同書は、「天平五年（七三三）徳道記録起等の文に出づ」として、上掲の簡略な文章に続いて、次のように記している。

長谷寺の観音を彫んだ木は、辛酉の年（傍註によれば推古九年）、洪水があつて近江国高島郡三尾崎より流れ出したものであることは、前述した通りであるが、いたるところで火災や病死の災難をまき起し、卜占は、これらが木の祟りであると告げた。ときに、大和国葛木下郡の住人出雲大満というひとがたまたまその近江国にきて、この木の凶霊の話聞き、この木で十一面観音の像を造ろうという心願を發した。いささかの資金も用意し、人夫を雇ったけれども、木は大きく、人夫は少ない。あきらめて帰国しようかと思つたけれども、ものは試しと綱をつけ曳いてみると、なんと驚いたことに、軽々と走るように運べるではないか。上下心をあわせて大和国城下郡（葛木下郡が正しい）の当麻の郷まで洩いてきた。しかし、大満には發願の心ばかりはあつたが、造仏の資力がなく、彼は観音造像を実現することなく世を去ってしまう。

かくして、この木はこのむらで空しく八十余年をすごすことになる。ところが、このむらでも疾病がさかんにおこつたので、むらびとたちは、長谷川の川盗に曳いていって棄てた。ここでまた、霊木は三十年を経ることになる。

沙弥徳道が、観音造像の願を發して、この木を泊瀬の峰の上に移したのは養老四年（七二〇）という。彼にもまた実現の力なく、悲しみ泣いて年を積み、ただ木に向つて礼拝し涙を流していた。そうこうするうち、藤原房前が綸旨を受けて造像の資金を国家から下し、神龜四年に十一面観音を造りおわつた。

観音像安置の磐について、同文のいうところは、こうである。徳道の夢にひとりの神人が現われて告げていう。この北の峯に大巖がある。掘り顕わしてこの像を立てまつれと。覚めてのち、昇ってみると方八尺の大石があり、その表面は平で手のひらのごとくであった。

かくして、神亀四年三月三十日、僧侶六十人を請い、導師は行基、呪願は義暹、一説では玄昉という堂々たる陣容で、二丈六尺の巨大な十一面観音像の開眼供養が行なわれた。徳道の背後には明らかに道明が控えていたと考えられるが、私度の一沙弥である徳道の心願は、資力不足の困難をのりこえて晴れやかに成就したというべきであろう。

『扶桑略記』の叙述は、右にもふれたように、二段に分かれて、簡単な造像の縁起報告と御依木の縁由をややくわしく記述しているのであるが、全体としてはきわめて簡素に縁起の要点のみを述べようとしている。ところが、『長谷寺縁起文』では、話の各要素の説明がくわしくなっている。新約聖書学者ブルトマンが、新約聖書の分析に当たって用いた原則の一つ、すなわち、のちの文献になるほど、話の枝葉末節がくわしくなるということを利用するならば、この『長谷寺縁起文』が後世の補充をかなり受けている事実は否定しえないと思う。

皇円のころにはすでに世に行われていたと思われる『今昔物語集』は、ほぼ『扶桑略記』の所伝と同じ内容で、両者は共に同一の原縁起によったと推察できるのであるが、『長谷寺縁起文』では、霊木の流転の過程がよりくわしくなり、かつまた前二者には見られぬ人名も登場する。

まず、その原所在地は、同じ三尾山中ではあるが、その蓮華谷というところで、その谷の霊異が説かれる。そして、大水によって流れ出したのは継体天皇即位十一年（五一七）とされて、推古天皇九年辛酉の歳（六〇一）よりもさらに古くされている。

漂よいついた場所も、『今昔』では近江国高島郡というが、『長谷寺縁起文』では志賀郡大津浦となる。ここで六十九年を歴たと、いやにくわしい。近江から最初に曳き出したのは、出雲大満ではなく、大和高市郡八木の小井門子という女性で、用明天皇即位元年（五八六）のこと、そこから当麻に移ったのは推古天皇即位二六年（六一八）で、ここに葛木下郡の人出雲大満ならぬ出雲臣大水と沙弥法勢とが登場する。不吉の災難が続出して「長谷郷北神河浦」

に曳き捨てられたのは天智天皇即位七年（六六八）であったという。それからさらに三十九年を歴て、文武天皇即位十年（七〇六）に、徳道が、師の道明の夢告を通して、この木と対面することになる。まことに、年代の算出など正確で、道真のごとき史家の参加を信じさせるに充分であるが、話の細部にわたる整備は、古縁起そのままとは考えられない。

例えば、徳道と霊木との対面は、『扶桑略記』や『今昔』のごとく（このことを聞きて心に思はく、この木の由来を聞くに必ず霊木ならむ」巻第十一、第三十一話）単純ではなく、師の道明が見た霊夢によるし、養老四年（七二〇）に木を峯に移したという記述は『扶桑略記』と『縁起文』とは一致しているが、これにも『縁起文』は、東峯（東岡、現観音堂の地）に三つの燈が見え、神のごときひとが徳道にそうすることをすすめる、という霊夢の話を加えている。

ただしこのように、観音像造立の重大な節目に必らず霊夢中の告示が現われていることは、長谷寺一山にとってはきわめて重要な意味がある。すなわち、この寺が、平安朝のころから、とくに夢告の霊場として尊信されたことと無関係ではないからである（西郷信綱、前掲書）。『縁起文』は、さらに、夢告によって、観音像を安置すべき宝磐が顕わさるべきことが徳道に知らされ、天平元年（七二九）八月十五日の夜半、天龍などの八部衆と八大童子らが作業して、この宝座が顕現したという。この件は、さきにもふれたように、『扶桑略記』にも見えているが、天平元年云々の文句はない。徳道が夢告を得、覚めてのち登ってみると八尺四方の大石を発見したことになっており、縁起の祖型をうかがわせる。

ともあれ、貧困な一私度僧である徳道は、奇異なる霊木を得て、多年の苦心のすえ、ようやく官資を獲得する機会にめぐまれて、まことに東大寺の大仏に象徴される奈良時代的な、二丈六尺という巨大な観音像を造立しえたのである。

った。

### 3 長谷寺の女性イメージ

かくして、古来の聖地泊瀬に、長谷寺が出現した。右において見てきたように、そこは水と山と磐とに関わる聖なる土地であった。『長谷寺縁起文』や『長谷寺靈驗記』は、すでに、そのような聖地の伝承を忘れかけており、もっぱら仏教的な語り口で、聖処たる縁由を強調しようとしている。例えば、『縁起文』では、そこが、四神相応の地であることを述べるとともに、行基の夢想に依って、そのことを論証すべく試みている。

すなわち、観音の立つ宝石に副って左脇には龍穴があり、無熱池（無熱惱池ともいう。ヒマラヤ山の北にあってガンジス河・インダス河・シーター河・オクサス河を流出させる源となっている、想像上の湖水。そこに棲む龍王が、八大龍王の一人、阿那婆達多龍王である）に通じ、八大龍王や小龍等が来たり守護するという。宝座の東西三百余歩には、二つの仙宮があり、東北の隅の仙宮の隣りの平坦地には日本の大小の神祇が集まり、後の山の地中には十六丈の水精の宝塔が埋まっている。東山には、前述のように、河をへだてて鵝形石、その石の南には杳形石があって、おのおのに天照太神と春日大明神が影向する、というのである。

あえていえば、無熱惱池に通じる龍穴を保持することによって、当山の観音は、水神との結合をかすかに残存し、農耕神たる機能を新たな形で開示しようと志向している、といえようか。また、観音の宝座たる磐石は、『縁起文』・『靈驗記』において、金輪際に根ざし、地面に露出している三つの岩の一つである。第一は天竺にあって諸仏成道の宝座となり、第二は補陀落山にあって観音の座となり、第三はすなわちこの山にあって、観音の示現し給う座となっている。金輪際とは、『俱舍論』に述べられている仏教の宇宙像・世界像の一要素なのであるが、虚空中に、最下部か

ら風輪―水輪―金輪と層を重ねて、金輪上の周囲を鉄田山てつちやまがかこんで、その大海中に、四大洲（勝身洲・胆部洲・牛貨洲・俱盧洲）がそれぞれ東・西・南・北に位置する。須弥山という山（妙高山とも訳す）は、このような金輪上で鉄田山にかこまれた宇宙の中心部にある。金輪際とは水輪とのさかい目に当り、大地の最深部である。

観音の宝座がかく規定されることによって、長谷寺は、磐座いわくらの信仰を仏教的に基礎づけると同時に、この地が聖なる空間であることを仏教的に、しかも根本的に新たに宣示しようとしている。右のような説明は、平安時代を経る過程で加重されてきたのであろうが、それにしても、それはこの宝座が大地に根ざす、すなわち大地の原理を顕現するものであることを、仏教の用語で語っている、と解しえよう。

水と岩と、そしてまたここに附加された龍穴⇨洞窟の神話的性質については、ここでは、いずれもそれらが、多くの神話学者や西郷信綱教授がすでに指摘しているごとく、女性原理を示すものであるとだけ述べておこう。われわれは、ここでもう一度、瀧蔵権現にかえってみなければならぬ。

すでに述べたように、瀧蔵権現は、新しい地主神として菅原道真をこの地に導入するにあたって、束帯の姿で神殿中より現われている。これは、明らかに、男性としての顕現である。しかし、この事例のみには、瀧蔵明神の本性は、理解できない。『長谷寺靈驗記』上第七は、次のような靈驗譚を告げている。

鳥羽帝（一一〇七―一二二年在位。のち院政）の後美福門院が懐妊したが、卜占したところ姫宮であるという。女院は歎き悲しんで、保延四年（一一三八）十一月十八日、長勝寺（長谷寺山内に醍醐帝の昌泰三年（九〇〇）に宇多帝が建立供養した）に参詣し、男子出産を祈願した。その夜の夢に、長勝寺の阿闍梨成海なる僧が現われ、「ゆめゆめお歎きあるな。この山の奥にある瀧蔵山に一人の尼僧がいる。日天子と嫁ぎ、高貴の男子を出産した。御懐妊の姫宮をこれと取りかえたいでしょう。」と告げた。女院は驚くとともに頼もしく思われて、一夜のお籠りで還御になった。

果たして同五年五月十八日、若宮が出産した。近衛天皇が、これである。彼の龍藏権現はこの尼である。観音が彼の権現と計られて、姫宮を転じて若宮となしたのであろう。

この話において、二つの日附けが十八日という観音の命日に合わせてあるのは、すぐ見てとれることだが、女性神たる水神が天神太陽と交わって男性の子神を産むという神話のモチーフが、この説話の背後にあることも、あらためて指摘するまでもあるまい。天神太陽は、また雷神という姿をとることもあるが、後者は、さきにふれた本長谷寺本尊示現の伝説とも関連してくる。われわれの主題に関連するので、この神話の型についてここで少し述べておこう。

太陽と女神ニ水神との婚姻による子神出生の型は、『魏書』高句麗伝（卷一百、列伝第八十八）が伝えるその始祖朱蒙誕生の神話にもっともよく現われている。三品彰英教授の要約に従って紹介しよう（『古代祭政と穀靈信仰』論文集、第五卷）。

高句麗は夫余から分れ出た部族で、みずから次のように語っている。すなわち始祖朱蒙の母は河神の女むすめで、夫余王によって室中に閉じ込められていた。すると女は日光に照らされ、身を避けても日光が追ってきて、ついに妊娠し、五升ほどもある大卵を生んだ。その母は卵を包んで暖い所に置いたところ、殻を破って男子が生れ出た。この子を朱蒙と名づけた。俗に朱蒙とは善射を意味している。

『三国史記』（卷第十三）高句麗本紀の同一テーマの所伝は、若干の発展を示している。右と同じく三品教授の要約によると、

東扶余王解かひよろ夫婁ふろうは子がなく、山川の神に祈って金色の蛙の形をした小児を得た。金蛙と名づけ、位を譲った。金蛙は太白山の南の優渤水で女子を得た。その女子がいうには、「私は河神の娘で柳花と申します。妹たちと遊んでいと一男子が現れ、自ら天帝の子解慕漱であると名乗り、私を態心山下の鴨緑江辺の室中に誘い込んで私通して去っ



てしまいました。父母は私通を責めて、私を優渤水に謫居させました」と。金蛙は奇異に思っ、この女子を室中に閉じこめておくと、女は日光に照らされ、身を避けても日光が追ってきて、ついに妊娠し、五升ほどもある大卵を生んだ。

前者について、三品教授は「日光感精型神婚神話」という名称をつけているが、この「日光感精型卵生伝説」と、天子解が登場する「人態的成婚型卵生伝説」との二型が『三国史記』に結合して語られている。思うに、後者における二型の結合は、あまり成功しているとは思えないのであるが、三品教授もいわれるように、『魏書』の所伝を古型と考えるべきであろう。

また、卵生という神話の要素の一つは、神の子の容器と考えられるべきことを附記しておこう。われわれの皇孫ニギノミコトは、高天原より真床追衾に覆われて降臨し、その子ヒコホホデミノミコトは、無目籠まなしかたま（『書紀』による。『古事記』では無間勝間まなしかつま）に入って海神の国へおもむく。さらに「鴨緑辺の室」が、高句麗王都（韓安）の東方近くにある水辺の岩屋を示し、そこに祭祀された女神を首都東郊の水辺に迎えて十月に祭るのが東盟祭である、という三品教授の指摘を記しておこう。なお『三国遺事』（巻第一、紀異第一、古朝鮮条）において古朝鮮の建国者檀君についても同様の伝説が語られているが、ここでは天神の子は仏教の帝釈天恒因の子恒雄となり、彼が同じく洞窟内にある河神の娘と神婚する。われわれも、毘沙門天と天（雷）神との習合を、すでに見た。

日本の神話・伝説にも、天神あるいは天神の子と水の女神との神婚を物語るものは多いが、賀茂神社の場合が典型的なので、それをあげておこう。

賀茂の建角身命たけつのみは、天孫と共に日向に天降り、神武天皇に従って東征し、大和の葛木山に宿ったが、しばらくして山城国相楽郡の岡田の賀茂に遷り、さらに「久我の国」とよばれていた、いまの賀茂川の上流の地に至った。丹波の

神野かみのという地の神伊可古夜日女かひいここやひめを娶めとって玉依日子たまよりひこと玉依日売たまよりひめを生なんだ。玉依日売たまよりひめが、ある日、石川の瀬見の小川に遊あそんだとき、丹塗りの矢が川上から下くだってきた。それを取とって床の辺にさしておいたところ、やがて妊娠こころして男子を生なんだ。成人のときに至いたって、外祖父の建角身命たけつのみことは、新屋を作り、酒を譲かんで、神集かみいを行なない、七日七夜宴なつしちやえんをひらいた。そして子神こかみにいうには、「汝が父ちちと思うひとに、この酒を飲のましめよ」と。子神こかみは酒杯さかづちをささげて天に向い祭まつをなし、屋根を破やぶって、天に登のぼった。そこで、外祖父の名によって賀茂かものの別雷命わかいかづちのみことと名なづけた。丹塗りの矢は、乙訓郡おとくにの社やしろにいる火雷命ほのである。建角身命たけつのみこと・神伊可古夜日売かひいここやひめ・玉依日売たまよりひめの三柱さんすゐの神は、山城国やましろの蓼倉たぐらの里の三井さんせいの社やしろになます。玉依日子の子孫こひごがいまの賀茂かものの県主あがたぬしらである（『山城国風土記』逸文）。

現在、別雷命わかいかづちのみことは上社かみやしろに、建角身命たけつのみことと玉依姫命たまよりひめのみことは下社したやしろに祀まつられている（この伝説の考証については肥後和男『日本神話の研究』を参照）。丹塗り矢にによる懐妊懐妊の類話るいわは、『古事記』神武天皇の条に見える。すなわち、美和みわ（三輪）山の大神おほまのぬしは、三島溝みしまのみぞの女を勢夜陀多良比売せやたたらひめの美しいのみにみそめ、彼女が廁せどに入いるととき丹塗り矢にに化まして溝みぞより流れ下り、その美人うつくしきの陰かげを突ついた。彼女は驚おどきふるえて逃げ出したが、その矢やを床の辺へに置おいたところ、たちまちもとの麗うつくしい男おとこに成なって、彼女を娶めとった。その子が富登ほとた多良比伊須須岐比売命ほとたたらひいすすきひめのみこと、またの名な比売ひめ多良比伊須須岐比売命ひめたたらひいすすきひめのみこと、命のみことという。神武天皇は、この姫ひめを正妻せいさいとしたといいうのである。セヤタタラヒメに当あたる女性にを、『日本書紀』は玉櫛たまぐし媛ひめとよんでいる。玉依姫たまよりひめとの類同るいどうを察さしえよう。

また、この三輪山の大神おほまのぬしは、『記』・『紀』ともに崇神天皇あそみかどの時代、生玉なまたま依毘売いひめを娶めとって意富おほ多泥古たねこを生なむ。崇神朝あそみかどに疫病えびが大いに流行はやりしたとき、大神おほまのぬしが崇神あそみかどの夢ゆめに現あわれ、「わが子のオホタタネコおほたたねこをして自分おのれを祭まつらしめたならば、天下あめつちが安やすらかになるだろう」と告つげたので、四方よつ方に探たづねて河内かみの美努みぬの村むら（『書紀』では茅渟ちぬ県あがたとする）に、そのひとを発見はつけんした、といいうのである。玉依姫たまよりひめ―玉櫛たまぐし姫ひめ―生玉なまたま依姫いひめ、そしてヒコホホデミノミコト（ホヲリノミ

コト)が神婚する海神の娘豊玉毘売とよたまびめ、その妹神玉依毘売かみたまという一連の名を見れば、玉たま(神の御魂みたま)であり、ひとつの生命力でもある)を憑せ持つ、天神の嫁たる水の女神のイメージを確定しえよう。水辺に機を織って神の降臨をまつという巫女は、その儀礼的形姿である。

瀧蔵権現にもどろう。『靈験記』では、もう一カ所で、この神は女神たる姿を現わす。下巻第一の話において、さきにもふれた長野県更級郡姨捨山の新長谷寺(金峰山長谷寺、長野市篠ノ井塩埜、信濃霊場十八番札所)の縁起が語られているが、ここに瀧蔵権現が登場するのである。

大和の長谷寺の宝石も観音もいまだ出現しないし百年ほどまえ、舒明天皇のころ(六二九—四一年在位)、右の地に允恭天皇(五世紀中の天皇の一人)六代の孫で白介の翁(介の字は永井校註本による)というひとがいた。祖父が不忠のことあってこの国に流され、土民となってきわめて貧困であった。幼少のうちに父母に死に別れ、考養のため、千日の間湯に諸人を浴せしめる供養と、每一本つつ千本の卒塔婆そとうばを立てる供養を発願し、苦心してそれを果たしたが、この供養成就の法要の導師のための布施もない。思い余って善光寺に参籠して祈念したところ、七日目の早朝、幻のうちに一人の僧が現われて、汝の所願を成就してやろうと告げた。更級郡に伴ない帰って宿願を遂げたが、さらに教えていう。「大和の泊瀬寺は生身の十一面観音の鎮まります地だから、毎月そこに参詣して現当二世の安穩を祈り、かつ両親の菩提をともらえ」と。

このような説教のあと、僧はくだんの湯の供養を受けて浴室に入ったが、異香あたりに薫じ、翁が怪しんで窓からのぞくと、なんと金色の阿弥陀如来がましますではないか。随喜の余り、室内に入って拝もうとすると、如来はましまさず、香のみ留まっていた。多年を経て湯屋がこわされたのち、その浴室の板七枚をこの新長谷寺の堂に収めた。いまに異香が薫っている。

さて、翁はその説示に従って泊瀬の山に尋ね入った。しかし当時はまだ宝石も観音像も現わされていないので、茫然として山に向っている、その中心のあたりに光を放つところがある。そこに卒塔婆を立て、毎月に香華を備えて念誦すること三年であった。ある夜の夢に、くだんの卒塔婆のもと、いまの観音の宝座のあたりに立像の観音がいます。その左脇に十七、八ばかりの童子が立って、告げていう。「ねんごろにこの尊に功を積んだ。汝の祈願は必らず成就するであろう。明日この山を出るとき、最初に会った女を妻とせよ」と。

夢さめて山を下向すると、泊瀬の里の森というところで、童子一人を伴に連れられた女性に出会った。まことに美麗で、これほど思い夢のお告げを語ると、翁に随って参りましょうと応じてくれた。更級郡にともない、共に生活すると、まことに心映えのよき女性である。

こうして月日を送る中、領家の蘇我蝦夷そがのえみしが、この女性の話をきいて、わがものとしたいという欲を起すことになる。まず蝦夷は、自分が負ければ千両の金を与えよう、勝ったときは女房をよこせという難題を出し、弓を競えと強制してきた。これは、観音を祈念して、翁が勝ち、千両の金を獲得できた。つぎには相撲をしようという。翁が勝れば領家代にしよう、負ければ女房をよこせ、とまたいうのである。翁は「あなたとならば私が勝負しましょう。もしあなたが代人を立てるのであれば、私もひとをさがしましょう」と答えて後日を約した。

とはいうものの困り果てて彼の女房に相談すると、「心配することはありません。私がさがしましょう」といって、連れてきた童子をどこかにさがしに出した。次の朝、六十ほどになるやせ衰えた男を連れて、童子が帰ってきた。この老人が相撲に勝ってくれたのである。翁は喜んで住所をたずねたが答えぬ。ひそかに彼の帰り先を見ると、近江国高島郡太山寺の大門の右の仁王であった。

白介の翁は、かくして領家代となり千両の金も得て富貴の身となり、観音への報恩のためにおのが敷地内に寺を建

立し十一面観音像を造立した。更級郡の新長谷寺がこれである。

その後九年を経て、その本尊の左手が忽然としてなくなった。ときに一天かきくもって雲が翁の家をまいた。夜半に及んで、彼の女房が翁に告げて「われは長谷寺の地主瀧蔵権現である。大聖観音の御使でここに来た。本尊のお手が失せたのも、わが所行である。これから本山に帰るが、ひごろ汝と親しかったと他人に話してはならぬ。ただし、形見のため、末世の衆生のために、わが手一つを留めておこう」というなり虚空に上った。童子も、「われは長谷寺山口の神である。ひごろ汝に仕えたと他人にいうな」と告げて、同じく虚空に消えた。

その夜、ひごろ彼の女房が持っていた手箱から異香が薫るのであけてみると、その中に彼女の左手が入っていた。七日たって、それは肉色から金色に変わった。本尊の失なわれた手に合わせると、ぴったりである。いまにその左手は生きたるごとく、暖かである。翁は五人の息子をもっていたが、死去に当り、おのおのに一万石を与えた。それから彼らを五万長者と、ひとびとはよんだ、という。現に更級さらしなの長谷寺は、「白助の塚」という地を伝承している。そして、この地も大和のそれと同じく一つの霊地であつたろうことは、まえにふれた。

さて、この話は、民話学者によって「女房難題譚」とよばれるものである。それは、男が美しく賢い女房の助けによつて難題をきり抜け、富貴を得て、何々長者とよばれるようになった、という型を持つ（関敬吾『民話の歴史』）。ここでは、この話の中で、瀧蔵権現と観音とが、左手を通じて一体となつてゐることを指摘しておこう。事実、他の女房難題譚では、女主人公は観音自身である。例えば、この『靈験記』所収のものでは下巻第二十話「近江国庁官付連歌則遁国司難事」があり、同一の話は『今昔物語集』卷十六第十八話にも石山寺の利益譚として載せられている。この話では観音が美しい女性として顕現し、国司の難題をまぬがれしめてゐる。ともあれ、ここで、われわれが女神としての瀧蔵権現の鮮烈な印象を与えられることは、否定できないであらう。

かくして、われわれは、次のような長谷寺観音の秘密開示の夢告を理解しえよう。天平勝宝五年（七五三）。聖武は讓位して孝謙天皇の時代）十一月十九日の夜、十六日から長谷寺に参籠した聖武は十一面観音の夢告を得た。すなわち、「濁世のタケキ衆生を和ル事ハ、只女人ナリ。我此光ヲ和テ、婦女の身ヲ現ジテ、久シク末代ニ及テ、国家ヲ護シ、衆生ヲ利ント思フ。顕露ニ有テハ、其憚リ有リ、仍テ久ク住ス可ラズ。速カニ我身ヲ覆隠スベシト云。」これによつて始めて観音に御帳がかけられるようになったと、『靈験記』はいう（上第二）。

夢中に、女神たる本性を開示した観音は、同じ瞬間に、身を秘すことを願う。観音の秘仏化への感覚をも、われわれはここで知りえたようである。